

【鵜飼遊楽図（江戸中期 六曲一双）】

こうした長良川の鵜飼の光景は、江戸時代（1603～1867年）の中期に製造された6枚に折り畳むことのできる一对の屏風に見て取ることができる。この屏風の絵は、長良川における季節の移り変わりと夜に開催される一連のイベントを表現している。右の屏風には、観覧船が漁舟の後に続く春の光景が描かれている。漁舟はばらばらの編成で下流に向かって進んでいる。一方、左の屏風には、6艘の漁舟が川幅一杯に一つの列を作る秋の光景が描かれている。これは総がらみと呼ばれる列であり、毎晩の見せ物のクライマックスとして、今日でもまだ行われている。

この絵には他にも、長良川の鵜飼の慣習における伝統的な技が披露される様子が詳しく描かれている。舟首のところでは、鵜匠が鳥の縄（手縄）を持って立っているのがわかる。鳥が素早く動いたり水に潜ったりすることで、縄がもつれている。絵には、鵜匠が今日と全く同じように右手で縄のもつれをほどく様子も描かれている。

屏風には、娯楽としての鵜飼見物の伝統もはっきりと描写されている。鵜飼見物は、1688年、有名な俳諧の詩人である松尾芭蕉（1644～1694年）がこの地を訪問した後、大幅に人気上昇した。彼は詩の中で、鵜飼を観覧した経験を綴り、庶民と貴族階級の両方において鵜飼見物の普及を促進した。

これらの絵では、観覧船の乗客が飲食を楽しみながらリラックスした時間を過ごす様子がはっきりと描かれている。女芸者とカラフルな服を着た若衆（若い男性のコンパニオン）が、お客に酒を注ぐ。また、いくつかの舟では、お茶を作るためのセットと重箱と呼ばれる豪華な黒塗りの食品容器が見られる。屋根とすだれが付いた船には、縁が塗られた円筒状の提灯（箱提灯）の家紋が示すとおり、ステータスの高い乗客が乗っている。

これらの絵に描かれた光景と長良川の現代の慣習の類似性は、この地域の伝統がどの程度保全されてきたかを示す揺るがぬ証拠である。屏風の現物は、岐阜市歴史博物館に保管されている。